

# 『生まれ変わりの朝』

十六夜 博士

4401文字

あらすじ:

莉央(りお)の家族は皆早起き。窓から差し込む朝の光と、漂うコーヒーの香ばしい香りに包まれるリビング。そんな気持ちの良い朝が莉央は大好きだった。そんなある日、朝の雰囲気が変わっていることを莉央は感じる。一見変わらない朝なのだが……昨日起きた出来事と関係があるのか……

窓から差し込む朝の光が、スポットライトのようにリビングを照らし出している。漂うコーヒーの香ばしい香り。

いつもより30分ぐらい寝坊をした莉央(りお)は、リビングに入ると、大きく伸びをした。  
—— あー、気持ちいいー

始まったばかりの今日がキラキラと莉央の心を彩る。

すでに朝ご飯を食べ終えたおばあちゃんとママが、テーブルに座りおしゃべりをしていた。ちょっと前に莉央を起こしにきたママが、「お寝坊さんね」と笑う。  
「だって、今日から夏休みだもん。でもちょこっとだけしか寝坊してないよ」

テーブルに綺麗に収まった椅子を引き出し、ちょっとふくれっ面をした莉央もテーブルに座る。

この家のみんなは基本的に早起き好きだ。おばあちゃんは、『朝は1日の出発進行だよ』と良く言っている。『出発進行ってなに？』と莉央が聞いた時、『電車が出発する時、車掌さんが言うんだよ。さあいよいよ電車が動きますよ、元気に気をつけて進んでいきましょうって意味だよ』と教えてくれた。ちょっとずれてる気もするけど、朝寝坊しいてると、1日の出発が遅れちゃうからもったいないってことらしい。

「じゃあ、朝ご飯作るね」とママがキッチンに向かった。

「莉央ちゃん、今日から夏休みなんだね。ただの日曜日じゃないんだ」

おばあちゃんが手にしていたコーヒーカップを置いた。

「そうなんだー。愛美(まなみ)ちゃんといっぱい遊ぶ約束してるんだー」

莉央のキラキラの笑顔がリビングをさらに明るくした。

莉央は、今、おばあちゃんとママの3人で暮らしている。パパは単身赴任でいつもは家にいない。来月のお盆にはお土産を一杯買って帰ってくるはず。おじいちゃんは、早くに亡くなっていて、莉央にはほとんど記憶がない。おばあちゃんもママも働いているので、朝がこんなに和やかなのは日曜日ぐらいだ。小学3年生の莉央は、平日用事がなければ、夏休みでも学童保育に通う。

60歳前のおばあちゃんは、ちょっと小太りで、どこにでもいる気のいいおばちゃん。莉央にとってはおばあちゃんだが、まだまだお婆さんという感じではない。30半ばのママは、ほっそりとした美人。小さい頃から見ている自分のママが美人かどうか、莉央には良く分からなかったが、愛美ちゃんのママや学童保育の先生が口々に、「莉央ちゃんのママは綺麗ね」と言うので、自分のママは美人なんだろうと莉央は思っていた。

莉央が朝食を食べ終わると、ママが言った。

「じゃあ、準備しよっか？」

今日は、愛美ちゃんのママが、莉央と愛美ちゃんをプールに連れて行ってくれる約束だった。

莉央は、「うん！」と頷くと、ママと自分の部屋に向かった。

莉央とママがリビングを離れると、待ってましたとばかりに、おばあちゃんがリビングの掃除を始めた。

掃除機の音が莉央の部屋にも聞こえてくる。莉央はママと一緒にプールの準備をテキパキとこなしていった。

「さあ、準備完了」

ママが、水着やタオルを入れたバッグを莉央に差し出した。笑顔でバッグを受け取ると、莉央は「行ってきまーす」と玄関に駆け出した。莉央の後ろから、「気をつけてねー」と、ママの声がする。

「はい」と答えると、莉央は同じマンションにある愛美ちゃんの家に向かった。

夏休みの初日から、莉央の心は踊っていた。

「ただいまー！」

一日中遊んだ夕方、プールから帰ると、莉央は玄関で大きな声を出した。廊下を抜け、リビングに入る。テーブルに座っていたママが、「おかえりー」と微笑んだ。

「おばあちゃんは何？」

おばあちゃんがない事に、莉央は気がついた。

ママの表情が曇る。

「おばあちゃん、病院に入院しちゃったの……」

「えっ……」

莉央は事態が飲み込めない。

だって、朝元気だった、と思う。

「階段で転んで、足の骨が折れちゃったの……」

「……」

——足の骨が折れるって……

何かとても痛そうで、大事件のような気もして、莉央は言葉を失った。

「でも、大丈夫。1ヶ月ぐらい入院すれば元気になるって。明日、ママ会社休むから、お見舞いに行こうね」

ママが莉央を安心させようとする。口元は笑っているけど、眼が悲しそうに思えた。

「うん……」

莉央はとりあえず頷いた。

次の朝、いつものように早起きすると、莉央はリビングに向かった。

夏休みなので、寝坊しても良かったのだが、おばあちゃんのことであって眼が覚めてしまった。

——早く病院にお見舞いに行きたい

リビングではママがコーヒーを飲んでいた。相変わらず、朝が早い。莉央が起きてきた事に気づくと、「おはよう、今日は早起きね」とママが笑った。

莉央も「おはよー」と返した。

「じゃあ、朝ご飯作るね」とママがいつものように言った。

昨日莉央が部屋に戻った時のままに、寂しそうに佇む椅子に莉央は座った。

——何かモヤっとしてる……

いつものようなスッキリとした1日の始まりではなかった。

病院での面会が始まる13時に、莉央とママはおばあちゃんをお見舞いに行った。

おばあちゃんがいる病室に着くと、莉央の鼓動が高鳴った。

——おばあちゃん、大丈夫かな……

ママに連れられて、病室に入ると、おばあちゃんはベッドを起こし、テレビを見ていた。

「調子はどう？」

ママがおばあちゃんに声をかける。

2人が来たことに気づくと、「あら、莉央ちゃんも来てくれたの」とおばあちゃんの顔に笑みが広がる。

「おばあちゃん、大丈夫！？」

莉央は、おばあちゃんに駆け寄った。

「大丈夫！おばあちゃんもドジだねー」

おばあちゃんが、ふふっと笑った。

「骨が折れて、痛い……？」

莉央は、苦いピーマンをかじった時のような顔でおばあちゃんの顔を覗き込む。

「もう痛くないよ。全然へっちゃらだよー」

おばあちゃんは、ポンと足を軽く叩いた。

元気で良かった、と莉央は安心した。

病院に行った翌日の朝、莉央はいつものように早起きした。

入院は1ヶ月と長い気もしたが、おばあちゃんが元気なことに、莉央は安心していった。

「おはよー」と言いながら、リビングに入る。今日もママは会社を休んでいた。会社に行くなら、もうこの時間にはママは出かけている。

——あれっ……

莉央は、いつもと何か違う気がした。

もちろん、おばあちゃんはいないし、寂しい気持ちはある。でも、そういう事ではないのだ。

——モヤっとしている……昨日と同じだ……

正体不明のモヤモヤ感を抱えたまま、莉央は、ママが作った朝ご飯を食べ始めた。

せっかくママが朝いるのに、何となくおしゃべりをする気が起こらない。

黙々と朝ご飯を食べる莉央を見て、「元気ないね」とママが言う。

「そんな事ないけど……」

「おばあちゃん居ないから寂しい？」

「そりゃ、寂しいけど……でもなんかそういう事じゃなくて……」

「そういう事じゃなくて？」

ママが促す。

「うーん、なんかリビングがモヤっとしてる……いつものように出発進行の気持ちがしない……」

莉央は自分の中のモヤモヤを素直に言ってみた。莉央の顔を心配そうに覗き込んでいたママが、何かにピンと来たように背筋を伸ばした。

「莉央ちゃん、明日、30分早起きしない？ 出発進行の気持ちになれる秘密を教えあげる」

「秘密……」

「そう、秘密！」

ママが笑った。

「うん……」

半信半疑で朝ご飯を食べ終えた莉央は、口元をティッシュで拭おうと、テーブルの端にあるティッシュボックスに手を伸ばした。

——あれっ、ティッシュが無くなって……

1日の出鼻をくじかれたようで、莉央はさらにガッカリした気持ちになった。

——明日、本当に出発進行の気持ちになるのだろうか……

翌日の朝、莉央はママに30分早く起こされた。

——ちょっと、眠いなあ……

眠そうに目をこする莉央に、ママが手のひらサイズの箒と塵取りを渡す。

「さあ、莉央手伝って！」

「なにこれ……」と戸惑う莉央をママはリビングに連れて行った。

「10分ぐらいで、パパッと掃除するのよ。床とか、ソファーとかにあるホコリを箒と塵取りでチャチャと取っていくの。そして、椅子とか、本を元の所にキッチリ戻すの。ティッシュも無くなってるか確認して、無くなってたら新しいのを納戸から取ってくる。とにかく、全部を誰も使っていない最初の状態に戻すのよ。1日の始まりに部屋をリセットする事で、新しい1日を昨日の続きにしないの。毎日生まれ変わった気持ちになって、その日1日を大切に生きていくの」

おばあちゃんとママは、この掃除をずっとやっていたらしい。莉央は気付いていなかった。

そして、ママは出発進行の秘密を全部教えてくれた。

おばあちゃんが電車の掃除をチャチャとやるパートをやっていること。その掃除にみんなが喜ぶのを見て、家でもやろうと思ったこと。その電車の掃除は、日本ならではの『おもてなし』として世界でも有名なものであること。電車の掃除からヒントをもらったので、『出発進行』っておばあちゃんが言っていること。おばあちゃんもママも平日は働いていて、平日は掃除機をかける暇がないから、この朝の掃除が丁度良いこと。朝は時間ないから、10分ぐらいで済ませること。朝から掃除機をかけるとうるさいから、箒と塵取りでやっていること……

おばあちゃんが入院した一昨日と昨日は、ママも気分が乗らなくて、やっていなかったらしい。

——だから、モヤっとしたんだ……

莉央は合点がいった。

ママを手伝い、約10分の掃除を終えた莉央は、リビングを見渡した。

椅子もテーブルにしっかり収まっている。ティッシュボックスにはティッシュの半透明なたおやかな姿。

莉央は早速自分の椅子を引き出し、座ってみた。さっき自分がテーブルに収めた椅子だ。

—— あー、気持ちいい！

たった10分の掃除が1日を変えるんだあ、と莉央は驚く。

約1ヶ月が経ち、昨日おばあちゃんが家に帰ってきていた。おばあちゃんが帰ってきて、莉央の家はまた賑やかさを取り戻した。

この夏休み、莉央は出発進行の掃除をずっと手伝っている。そして、今日も手伝うために、早起きをした。

リビングに向かうと、ママが箒と塵取りを持って待っていた。

箒と塵取りを受け取ると、莉央の背後から声がした。

「莉央ちゃんも手伝ってるの？」

おばあちゃんがリビングの入口に立っていた。

「おばあちゃん、まだ無理しちゃダメよ」

ママが心配する。

「楽をすればそれだけ回復が遅れるの。でも、莉央ちゃんが手伝っているんなら、おばあちゃんはここでみてよかな」

おばあちゃんが首をいたずらっぽく傾け微笑んだ。

「うん！」

莉央は元気に頷くと、ママとテキパキと掃除を始めた。

そして、10分後、掃除が終わる。

「あー、気持ち良くなったねー。うーん、心も澄み渡るよ！」

おばあちゃんが明るい声をあげた。

莉央は鼻高々に箒を掲げると、前方に箒を振り降ろした。

「しゅっぱつ、しんこーう」

ママが教えてくれた出発進行のポーズだ。

3人の笑い声がリビングを埋め尽くす。

太陽がリビングにスポットライトを作り始めた。

世界に先駆けて始まる今日を照らし出すように。